●証言による『南京戦史』（2）

46期　畝本正巳

二、南京の防衛態勢

消耗持久戦略への転換
――ゲリラ戦の発動――

蔣介石は7月17日の「最後の関頭声明」において、

〝もし芦溝橋を日本軍に占領させたならば、北平は第二の奉天になり、北支は第二の満洲となり、更に南京は第二の北平となるであろう。いかなる犠牲を払っても断乎抗争すべし〟

と述べ、中央軍を陸続として北上させて、対日強硬策に踏みきり、8月9日の大山事件（大山海軍中尉らが中国兵のため射殺された）をきっかけとして、戦火は上海に燃えつつった。

そして、8月15日、蔣介石は「対日抗戦総動員令」を発令し、大本営を設置して自ら陸・海軍総司令官の地位につき、全国を四つの戦区に分けて全面戦争体制を整え、9月以降、日支両軍の死闘が繰りひろげられた。

そして11月5日には我が第十軍が杭州湾に上陸し、13日には第十六師団が上海戦線の背後、白茆口に上陸するに及び、上海戦の大勢は決定的となった。

『蔣介石日記』は次のように述べている。

11月7日、「戦闘力を保持して、抗戦を持久することが重要である。いまや、各戦区は遊撃戦を発動し……敵を疲労させるべきである」

11月13日、「抗戦の最後の地区と基本的な戦線は、粤漢、平漢鉄路（現在の北京―広東線）以西となろう」

そして、11月19日には首都を重慶に移すことを決定し、軍・政府機関の移転を開始した。12月8日、わが軍が南京外郭の防衛線に進出したころ、蔣介石は飛行機で南京を離脱している。

12月7日、「西方に移すべきものはすべて輸送を完了した。もし、私自身が10日も早く離京していたならば、大局はもっと手に負えないものになっていたであろう」と述べている。

このように蔣介石は11月7日、消耗持久戦略に転換し、遊撃戦を発動した。したがって、中国軍の上海―南京防衛の一連の作戦は、南京政府機関、中国軍の大部（八十三コ師約四十万　注(1)）を江北に撤退させるための「退却掩護作戦」であり、南京防衛作戦も「この地を固守して援軍を待つものではなく、敵軍の消耗を増大する」目的であった。

注(2)

このような退却掩護作戦において、日本軍の進撃を食い止め、遅らせるためにあらゆる手段がとられた。橋梁、道路は徹底的に破壊され、家屋は焼かれ、食糧は持ち去られ、日本軍による利用を妨げた。進撃路上の重要拠点では激しく抵抗が試みられ、敗れた中国軍は後方地域に潜入して、ゲリラ化して日本軍を襲った。

【注】(1)　方面軍特務部長の11月25日の中央に対する報告「開戦以来当方面に現れた敵総兵力八三コ師、うち約半分は消耗し、現在活動できるもの四十万内外と判断す」。

【注】(2)『抗戦艦史』、中華民国国防部史政処編

宣伝された南京要塞とその実像

蔣介石はドイツの軍事顧問の指導をうけて、城内には鶏鳴寺高地の地下防空要塞、獅子山砲台（南京城北隅）を構築し、城外にはヨーロッパ戦線のマジノ線やジークフリート線をまねて、要所にトーチカを設けて防衛線をつくり、数ヵ月前から「難攻不落」と内外に宣伝していた。しかし、これを実際に見た中立国訪問者の話では、間に合わせのトーチカがいくつかあるだけで、他の防衛施設も土嚢を積み上げたものや、ガラクタをベッドフレームで補強した程度のものであったという。

また、城外十五マイルの地域は「空屋清野」戦術によって、樹木、家屋を焼きはらい、日本軍によって利用されそうなものを一掃した。これも、中立国の新聞記者たちは①中国流の大きなジェスチュア、②怒りとフラストレーションのあらわれ、③どうせ日本軍にやられるのなら……という気持ちからで、この焼き払いは、実際上は軍事目的に殆ど役に立たなかったと見ている。（ダーディン記者の記録、『南京大虐殺のまぼろし』172・173ページ）

南京要塞の実像は以上のとおりであるが、首都の攻防であるから、世界の関心が集まったことは当然のことである。中立国とはいえ、日本に敵意を有する英・米・独の宣教師、新聞記者たちは、冷たい眼で日本軍の行動を見つめ、針小棒大に伝聞・憶測まで交えて報道したことは否めない。

南京の軍事的地誌

首都南京は、背後に揚子江を控えてその彎曲部に位置し、京滬鉄路（上海―南京線）の終点として舟便により対岸浦口からは津浦線（天津―浦口）につながる交通の要衝である。

面積・人口　首都南京といえば、大都市の如く思われ勝ちであるが、東西約五・三キロ（中山門―漢中門の直距離）、南北約八キロ（太平門―中華門の直距離）で総面積は約三五平方キロ、城外の下関碼頭や水西門・中華門外の市街を含めても、三九～四〇平方キロである。東京都の大田区（四一・七平方キロ、人口、六六万人）ぐらい、都市でいえば、鎌倉市、茅ヶ崎市程度の面積である。

戦前の人口は約一〇〇万といわれるが、上海事変勃発以来、爆撃を受け、さらに南京攻撃が近づいて政府機関が重慶に移転し、富豪などが疎開したため、人口はかなり減少した。

ルイス・S・C・スミス博士（金陵大学社会学教授）の調査によると、「南京陥落当時（12月12日～13日）の人口は、二〇万から二五万であった。昭和13年3月から行なった抽出調査の結果は、二二万一一五〇人であるが、この数は調査の手が届かぬところもあり、当時の人口総数の八〇～九〇パーセントにあたる」と述べている。

（【注】『南京地区における戦争被害』、一九三七年12月―一九三八年3月）

南京の市街地は、南北を通ずる中華路・中正路―中山北路、東西を通ずる中山東路―漢中路に沿う地区に密集し、全市面積の約三分の一強に当たる。従って、この地域に二〇万から二五万の市民が残留していたことになるが、南京攻撃が迫るにつれて、門西・門東地区（中華門正面の城内南部）および城東地区（通済門・光華門・中山門正面の城内東部）の住民は、城外あるいは難民区に移動した。

12月17日付（注）国際委員会発、日本大使館宛第六号文書『難民区の特殊地位の解釈』の中に次のような文面がある。

＜貴国軍隊が13日、南京入城の際は、あらゆる市民は殆ど完全に難民区内に蝟集し、中国軍隊の強奪にも遭わず、又猛烈なる砲爆撃も受けざるをもって、区内の損害状況は甚だ軽微にして……＞

この第六号文書によると、スミス教授が推定した約二十万人が、ことごとく、狭い難民区（東西一・六キロ、南北二・二キロ）に蝟集したことになる。

12月13日、真っ先に城内に入城した各部隊の証言（後掲）によると、難民区以外の城南、城西、城東、城北地区では、殆ど住民の姿を見ていないので、大部分の市民が難民区

南京市街重要施設要図

幕府山砲台
浦口
下関
獅子山砲台
捲江門
金川門
和平門
至上海
京滬鉄路
紫金山
明孝陵
中山陵
太平門
玄武門
玄武湖
中央路
米国領事館
英国領事館
中央党部
日本領事館
ソ連領事館
国民政府
軍官学校
金陵大学
金陵女子大
五台山
中山路
中山北路
中山東路
中山門
漢中門
漢中路
中央ロータリー
中正路
財政部
飛行場
江東門
莫愁湖
水西門
中華路
通済門
光華門
雨花台
中華門
揚子江
N
0 1 2 3 4km

掃蕩地区要図

12月13日16時30分

中央鶏頭
捲江門
9D
7i
中山路
中央路
北部掃蕩地区
外交団が提議シ我ガ軍ニ拒否セラレタル中立地帯
南京
漢西門
漢中路
16D
N
中正路
中山東路
9D
南部掃蕩地区
35i
飛行場
古物保存所
10A
中正街
公園路
中山門
中華路
通済門
外五竜橋
光華門
1/25,000

掃蕩区域及び街兵配置要図

(歩兵第七聯隊・昭和12年12月14日)
(提供者　城島超夫)

獅子山
N
梅軍部
捲江門
1/25,000
至中央門
玄武湖
中央路
16D
首都飯店
外交部
鉄道部
軍政部
III/7i
ノキシコ(領)
馬鞍山
殷高法院
金陵大学
金陵女子大学
I/7i
II/7i
清涼山
五台山
司法院
至中山門
漢西門
漢中路
10A
凡例
中国側の官公署
当時出書された外国権益
(領)領事館
(教)教会
(石)石油会社
(文)学校

●13年1月16日「蔣介石を相手とせず」政府声明にいたる内幕を物語る興味深い文書二通をご紹介する。この統帥部と政府との対立を、とくとご覧ありたい。〈編集委員〉

『対支那中央政権方策』〈要約〉

昭和12年11月2日

参謀本部第一部第二課

方針

現下時局解決のため現状に於ては尚現中央政権（蔣政権）をして講意我に提携せしめ全支の問題を統一処理するの方針を堅持す。

本項の目的達成の為には現中央政権が一地方政権たるの実に堕せざる以前に於て長期持久の決心に陥ることなく其面子を保持して講和に移行する如く我諸般の措置を講ずるを要するものとす。右努力は主として本年内に尽さるべきものなりとす。

理由

一、東亜経綸の大局的見地より

静に支那本然の姿を観るに近世の歴史東西南北悉く侵略受難ならざるはなし支那人ならずとも排外の思想勃発せざるを得んや我亦友邦の為に之を憂ふる所以なり而して排欧米就中防共の問題は支那の為には国内の問題にして東亜のためには日支共同の関心事なり。

東亜の経綸は支那の解放と日支の提携とより始まる而して支那最近最大の苦悩は日本の威力と「ソ」邦の赤化なるを思ふとき日本が支那を善導するに道を以てし所要の統一を助け其脅迫感を除くとき日支提携の大道此に通じ支那は欧米勢力就中赤化より自己を解放するに専念するを得べく近き将来に予想すべき諸般の事態に処して支那を以て東亜経綸の伴侶たらしむるを得ん。

二、日支問題解決上の見地より

日支全般の問題を根本的に綜合して解決し次期の東亜経綸に前進せんがためには支那に中央政権の存在を必要とし之がためには反省せる蔣政権若くは其継承政権の存続を必要なりとす。

蓋し蔣政権の否定は彼等を反日の一点に逐ひ込み窮鼠反噬の勢を馴致し其崩壊と否とに拘はらず結局相当年月の間に亘る全支分裂の出現となるべく此の間必然的に「ソ」英米策源の推進と相俟ち此に永久抗争のため帝国は永き将来に亘り之に莫大の国力を吸収せらるべく且東洋を駆て欧米鬚の好餌に供し東亜経綸の前途を誤る所以なればなり。

而して現政権一派の真の翻意に関する可能性は寧ろ将来に於ける我が国力の充備と我が対支政策とに懸る問題にして既に日本の威力と欧米の不信とを体験したる今日抗日の不利を認め過酷ならざる条件下に講和に入らんとしあることは想像に難からざる所なりとす。

三、防共上の見地より

支那赤化を最少限度に極限するが為には中央現政権一派の統制力崩壊するの以前に於て本事変を終結するを可とし又赤禍の駆逐には事変後の将来に於て現中央政権一派をして西面せしめ之を赤系分子の清掃に推進するを以て東亜経綸大局上の上策とすべし。

蓋持久長きに従ひ蔣勢力の衰微と共に分裂の形勢を馴致し赤禍の抬頭を予想すべく又何れの型式なるに拘らず講和発生の場合には赤系分子は分離して奥地に残存すべければなり。

而して最悪の場合依然として排日統一政権の存続することあるも之が容共ならざる限り其我に対する不利は分裂に乗ずる赤化が日満両国に及ぼす禍害に比ぶれば尚軽易なるものと謂ふべし。

〈当時、一部長下村定、二課長河辺虎四郎〉

『講和問題に関する所信』

筆者不明〈近衛文書〉

昭和13年1月初旬調製と推定

一、政府としては従来屢々声明せる通り今次事変を契機として東洋永遠の平和の基礎を確立すべきものとし出来るだけ禍乱の根源を将来に残さざる様徹底的なる解決を期し其為には相当長期に亘る対戦も敢て辞せざる覚悟と用意とをなし居れり、速に局を結ぶことは元より望ましき非なれども中途半端の解決をなして局を結び一両年を出でずして再今回の事変を繰り返すが如きことありては昨年来の大犠牲を全く無意義に終らしむるものにて姑息なる妥協は極力排すべきものと考へ居れり。

一、今や南京陥落し蔣介石政権も昨今は頗る窮境に立つに至りし如くなるも未だ彼の権威全く地に墜ちたりと断ず可らず少しく手を緩めれば再頽勢を挽回し来るや明なり謂はゞもう一押しと云ふ所なりかゝる状勢にある際我より進んで条件を提示し講和を促すことは我に重大なる弱点なき限り軽々になすべきことでなく却てそれが為に彼の侮を受けて彼の戦意を復活せしめ大害を将来に招く恐ありと考へらる故に政府側としては独逸大使を通じての今回の交渉に対しても必ずしも中心より賛成せるに非ず只軍部側の切なる希望もあり且今回提示せる要求は我最小限度の要求なりとの了解の下に賛成したるなり従てもし支那が此要求を全面的に承諾せざる場合には此交渉は当然打ち切るべきものと了解し居れり。

一、然るに最近に至り軍部側にありては支那が此要求の一部修正を申込み来る場合には更に多少の譲歩をなしても何とか此際講和を成立せしめんと希望せらる由を聞く、元来我より進んで講和条件を提示することさへ如何かと思はるゝに彼の一部拒絶に遭うて再び譲歩の色を見するが如きことありては益々彼の乗ずる所となるべきや明なり政府側としては軍部がかくの如き拙策を採りてまで講和を急がるゝ真意を了解するに苦しむ次第なり。

一、こゝに於て政府側としては軍部がかくの如く講和を急がるゝには何等かそこに深き事情が存するに非ずやと推測せざるを得ず、然るに今日迄の陸軍大臣の説明だけにては今日講和の急がざる可らざる理由明白ならず、もし真に此際講和を急がざる可らざる事情存するならば陸軍大臣は率直明白に之を他の閣僚に説明すべきものと信ず、閣僚も其説明により真に能く事情を了解するに至らばいかなる譲歩も之を忍び局を結ぶことに全力を注ぐことゝ成るべし、恐らく之に対し事情を解せざる一般国民の間には猛然として、反対運動起るべきこと予想せらる其際各閣僚が陸軍大臣の説明により真に能く事情を了解し居れば一致団結断乎として政府の責任に於て之等反対運動を抑圧すべし、然れども不幸にして陸軍大臣の説明が十分他の閣僚ヲ納得せしむる能はざる場合には政府全体としては軍部側と別個之独自の所信に向て邁進する外なかるべし、これ国務大臣として輔弼の責任を全うする所以なりと信ず。〈全文〉

に移動したことは事実であろう。

とすると、この三・五二平方キロの狭い地域に、二十万人を収容できたであろうか。東京都の都心、人口密集地である文京区、台東区、墨田区の人口密度（一平方キロあたりの人口）は一七、三四四人である。（面積三五・三四平方キロ、人口、六一二、九三四人―昭和57年12月）

二十万人いたとすると、難民区の人口密度はその約三・二倍強の五六、八一八人に達する。

また、スミス博士は前記報告書の中に、「国際委員会が維持している難民収容所に住んでいたものは二万七五〇〇人、収容所に入らず安全区内に住んでいたものは六万八千人」とあるから、これからみると合計、九万

五五〇〇人になるが、12月17日の国際委員会文書による難民区収容人員数は、四万九三四〇〜五万一三四〇人という。（後掲）

このように、難民区収容人員数は、十万弱から五万人内外と大きな差があるが、二十万人が難民区にそっくり収容されたとは考えにくい。

▼中沢三夫氏（当時・第十六師団参謀長24期）の述懐によると、〈南京入城後12月13、14日掃蕩したが住民を見ず、12月末における居住証発行の状況より推算すると、当時の難民は十万内外なり〉という。

したがって、南京占領当時の残留市民数、二十万説は、スミス教授が翌年3月調査の、南京戦後、城内に復帰した住民数を基礎にした推定であって、当時の実態からすると過大な数字ではなかろうか。

重要施設及び外国権益　城内には政府・党の諸施設のほか、軍官学校、鶏鳴寺防空砲台、獅子山砲台があり、中山門西南方には城内飛行場があった。また文化遺跡としては、中山門内に明故宮、故物保存所があった。

外国の公館、外資系の△△公司、××洋行といった商社、キリスト系の諸学校、教会、病院も点在し、とくに下関碼頭には外資系の倉庫、工場がそれぞれ外国旗を掲げ、これらの建物が敗残兵や難民の隠れ家として利用された。（後掲）

南京市街重要施設図および当時、軍司令部から示達された難民区立入禁止区域、特に朱書された外国権益要図は11ページのとおりである。（上海派遣軍岩仲戦車第一大隊第一中隊長、城島赳夫氏・提供）

難民区（安全区）の区域、収容人員　難民区は南側＝漢中路、東側と東北側＝新街口―鼓楼―中山北路を経て山西路まで、北側＝山西路、西側＝西康路を境界とする東西一・六キロ、南北二・二キロ、（三・五二一平方キロ）の地域である。

前述、スミス博士の調査報告によると〈国際委員会が維持している難民収容所に住んでいたものは、二万七五〇〇名、収容所には入らず安全区内に住んでいたものは六万八〇〇〇人であり、12月後半と1月中の最盛期の収容人員は七万人であった〉という。

これからみると、12月13日南京占領当時には、難民区には九万〜十万を下らない難民が逼入していたものと推定される。

【注】難民区国際委員会

国際委員会は、12月はじめ国民政府が南京より撤退した際、外国の紳商・宣教師によって組織されたものであり、前記の地域を難民区とし、この地にある難民の救済、秩序維持に当たった団体である。

日本当局はこの申し出に同意したが、守城司令官唐生智が降伏を拒否したため、現地軍当局は公式にはこれを認めなかった。これは敗敵が難民区内に潜入し、占領後の治安維持に障碍となることを恐れたためである。しかし、各部隊には進入禁止区域を明示し、砲・爆撃を厳め戒め、戦禍の波及を防止したのである。

国際委員会の委員は次のとおりである。

委員長　ラーベ　独　シーメンス洋行
秘書　スミス博士　米　金陵大学
1　フォール　英　アジア石油公司
2　メージ牧師　米　米キリスト教会
3　シェルズ　英　和記公司
4　ハンソン　デンマーク　テキサス石油公司
5　パンティン　独　興明貿易公司
6　マコー　英　太古公司
7　ビカーリン　米　スタンダード石油公司
8　スパーリン　独　上海保険公司
9　ベーズ博士　米　金陵大学
10　ミルス牧師　米　長老会
11　リアン　英　亜細亜石油公司
12　トリンマー　米　鼓楼病院
13　リスケ　米　金陵大学

【注】12月18日付、国際委員会発、日本大使館宛、第七号文書『12月17日・難民区収容所表』

（地点）（難民人数）（性別）

1 旧交通部　10,000　家族
2 五台山小学校　1,600　家族
3 漢口路小学校　1,000　家族
4 陸軍大学　3,500　家族
5 小桃源南京語学校　100　男
6 軍用化学廠　4,000　男
7 金陵大学附属小学校　6〜8,000　家族
8 聖書師範訓練学校　3,000　家族
9 華僑招待所　2,500　家族
10 南京神道学院　2,500　家族
11 司法院　ナシ
12 最高法院　ナシ
13 金陵大学養蚕科　4,000　家族
14 金陵大学図書館　2,500　家族
15 ドイツ倶楽部　500　家族
16 金陵大学女子文理学院　4,000　婦女子
17 法学院　500　家族
18 農村師範訓練学校　1,500　家族
19 山西路小学校　1,000　家族
20 金陵大学宿舎　1,000　婦女子
（総計）　25,500〜35,500

なお、国際赤十字会南京委員会（委員長は米国人メージ牧師）は、当時、外交部、鉄道部及び軍政部内の傷兵医院の設立、管理をしていた。

難民区には常民だけでなく、多数の便衣兵が潜入していたことは明らかである。

中沢三夫氏の東京裁判における宣誓口供書

(1)第十六師団は12月13日未明、中山門から約二コ大隊を入城させ、予め指示してあった地域、太平門、上関門、下関及び中山路をもって画する地域を掃蕩させ、翌14日も引き続き掃蕩した。

15日、第十六師団は司令部及び小部隊をもって城内に入ったが、師団の担当区域には住民は逃亡していていなかった。

(2)入城後、南京市内の中山路から下関に通ずる公路上に夥しい軍服、剣、弾入れ、軍帽などが捨てられていた。これらの軍装を捨てた兵は、便衣となって潜伏していることは、当時の状態からみて明らかであった。なぜならば、城内掃蕩の際、難民区を除いては城内に支那人が居らなかったからである。

そこで難民区の住民を全部常民だと信ずることができず、難民区域内の住民を調査する必要を生じたのである。

（以下省略）

▼また、当時の警備司令官佐々木到一少将（当時・第十六師団歩兵第三十旅団長18期）は、〈12月25日頃から日支合同の委員会をつくり、日支人立会のうえ、敗残兵なりや否やを審査し、常民には居住証明書を交付し、敗残兵と認定された者は外交部に収容した。その数は約二千名〉と、『私記抄』に述べている。

上海戦の兵站基地として　上海の大消耗戦は約四ヵ月に及んだが、南京は中国軍上海戦線七十五コ師（後に八十三コ師）の作戦根拠地、重要な兵站基地であった。

上海の後方連絡線は、鉄道による南京、杭州方向と陸路による上海―湖州―蕪湖方向及び揚子江の水路利用が考えられる。しかし、揚子江を利用する水路輸送は、わが海軍航空部隊の攻撃と揚子江溯航作戦により大打撃をうけたであろうし、杭州線も11月初旬第十軍の上陸、進撃により遮断されるに至った。

残った主要連絡線は南京方面であり、蕪湖方面が補助的役割を果たした。

したがって、南京の下関や城内外の軍事施設には、莫大な軍需資材が集積され、前線への人員の補充、後送された負傷兵が多数収容されていたと推定される。

ニューヨーク・タイムスのダーディン記者は、「空家になった政府の建物、学校は勿論のこと、個人の邸宅まで病室に充当されていた」と述べ、13日城内に真っ先に進入した土屋正治氏（19i第四中隊長46期）、平本渥氏（7i第二中隊の兵士）その他の証言にあるように、大きな建物には重傷兵がぎっしりと収容されていた。

▼土屋正治氏の証言

〈私は12月13日、光華門を占領した歩兵第

三十六聯隊を超越して、歩兵第十九聯隊の先陣として城内に進入した。

市街に深く進入すればするほど、まさに「死の街」という感じを深くした。敵弾の飛来はもちろん、人影一つ見えず、蕭然とした軒並みのみが果てしなく続いていた。何キロぐらい前進したであろうか、とある大きな鉄筋コンクリート造りの建物に到着したが、ここで全く思いがけぬことに遭遇した。

それは、講堂らしい室内に入ると、後送の余裕がなかったのであろう、取り残された重傷兵の枕辺に、白衣の大勢の看護婦が毅然として立っている光景であった。私は深く頭を垂れてそこを退去した。戦闘を覚悟して入城したが、この日は無血のうちに夕刻を迎えた……（以下略）＞

【注】土屋氏は光華門から城内を左折し、大光路―白下路を進んでいる。土屋氏は軍機局と図示しているが、衛生局政治学校ではないかと思われる。

▼平本運氏の証言

＜歩兵第七聯隊第二中隊は12月13日朝靄をついて、中山門寄りの破壊口から城壁を斜降して、城内飛行場を横断して市街掃蕩の先陣を進む。私は無我夢中で先頭について前進した。

……夕闇迫る頃、難民収容所らしい司法行政院（注・司法院であろう）に行くと、真っ暗な建物の中には、多数の難民たちが、揺らぐローソクの灯の中でうごめいている。私たちは施す術もなく、そこを立ち去る。

大通りを走りつづけて行くと（中山北路であろう）、右側に立派な近代建築の四階建ての外交部の建物が見える。鉄格子の幅広い表門は堅く閉めて、右の通用門には二人の中国軍の衛兵が完全武装で立っている。その一人は雲をつくような巨漢で、入れろ…と押し問答をしたが、凄い形相をして拳銃を向ける。何か異状を感じたので、素早く銃剣を構えて胸に押しあてると、一人が驚いて〝シーサン、シーサン〟といって中に案内してくれた。

広い中庭では、山積された書類や什器類が赤々と燃え、そのうえ、地階から運ばれる衣服類が投げこまれて燃えている。中に入ると各階とも正規軍の負傷者で通路まで塞がり、その殆どが重傷者である。

中村亀吉上等兵、浜島幸一君と私は「シンク、シンク」と頭を下げて、片言の中国語を連発するのが精一杯であった。階段の踊り場の戸棚の中に、重傷の士官らしい者が身を丸くして寝ている。一人の重傷兵が私の足に縋って水筒をつかもうとするので、水筒を傾けて飲ませようとしたが、水は一滴もなかった。

この惨たんたる情景に驚いたが、どうしようもない。忽々に退門したが、こんどは衛兵は直立不動で、挙手して見送ってくれた。＞

南京に後送された傷病兵　11月25日の中支那方面軍特務部長の中央に対する報告によると、前述の通り「上海の支那軍八十三ヵ師のうち、その半数は損耗しており、その実戦力は約四十万内外」といわれる。上海の激戦間に逐次増援して八十三ヵ師の大兵力となった中国軍は、約四ヵ月間に累計四十万人の死傷者を出したことになる。これらの死者は現地において処置され、負傷者は逐次後送されたのであろうが、後送された負傷者の数は、どのくらいになるであろうか。

当時における日本軍の戦死者と負傷者の比率をみると、戦死者九、一一一名、戦傷者三一、二五七名であり、その比率は一対三となる。この比率を中国軍にあてはめると、負傷者数は約三十万人と推定される。

この負傷者を南京と蕪湖方面に後送したとすれば、少なくとも十五万以上の負傷者が南京に後送された計算になる。三ヵ月間に及んでいるので、一ヵ月五万人、一日千七百人平均で連日、南京に後送されたことになり、莫大な人数である。

これらの負傷者は、一時南京に逗留し、逐次、重傷者は舟で漢口へ、あるいは陸路江北に移送されたと推定する。しかし、南京の病院で陣没して城内の墓地に埋葬されたものも相当数にのぼるであろう。

▼中沢三夫氏は次のように述懐している。

＜南京は11月下旬より、遠く南方前線の戦死傷者の収容所となり、移転せる政府機関、個人の私邸まで強制的に病室に充てられ、全市医薬の香び浸したる状態なり。これにより生ぜし死者も亦すくなからず。

入城時、外交部の建物は大兵站病院開設せられあり。難民とともに外人の指導下にありて、数千を算する多数の患者を擁し、重傷者多し。日々、三、四十名落命しつつありたり。

これらの処理を、運搬具乏しき当時如何にせしや疑問にして、附近に埋葬せられたること確実なり。＞

もし、一日平均三、四十名死亡したとすれば、その他、鉄道部、軍政部内傷兵医院、中央医院などの兵站病院を合計すれば、平均一日百名内外の死亡者を生じたと考えられる。

上海の激戦は8月下旬以来約三ヵ月続いたから、上記計算を単用すると、約九千人が南京において陣没したと推定される。

城内墓地の埋葬死体数を、すべて日本軍により虐殺された死体として算えているが、これは行き過ぎであろう。

また、南京撤退にあたり後送できなかった者、あるいは移送途中に陣没した者もあろう。

次の藤田清氏、犬飼総一郎氏の証言は、南京攻略戦における実例であるが、南京総撤退時においても、このような事態が多くあったものと推察される。

▼藤田清氏（独立輜装甲車第二中隊本部・曹長）の証言

＜12月13日夕、雨花台北麓の兵技専門学校（兵工廠であろう）に宿営したが、校舎前のプールのような空ドック（コンクリート製）に、半焼けになった死体が四、五百体放置されていた。＞

▼犬飼総一郎氏（歩兵第十九旅団司令部通信班長48期）は、「忘れ難い入城直後の思い出」として次のように述べている。

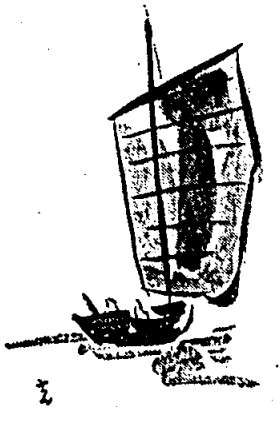
＜私が12月13日の夕刻、中山門から単騎で入城した時のことである。城門を入ってしばらく行くと、道路の右側に、殆ど無疵に近い状態で二階建ての中央病院があった。その中に十人ぐらいの中国軍の傷病兵が寝ていたが、彼らはきびしい視線で私を見つめた。

私は隅に寝ていた十五、六歳ぐらいの一番若い兵隊に語りかけた（注・犬飼氏は中国語が堪能である）。彼は軍官学校の生徒であるが、紫金山の戦闘で戦傷し、動くことができないと言った。私は、部隊に帰ってすぐ軍医を連れてくるから、大事にしているように言い聞かせて、病院の様子をざっと見回して司令部に帰った。

街は人ッ子一人もいない森閑としていたが、かれこれ二時間近くかかったろうか。軍医を連れて引き返してみると、病室には誰もいない。あたりを探すと、くだんの少年兵は、病院の傍の井戸に身を投げて死んでいた。不自由なからだで這いずって、ここまできて身を投げたに違いない。他の傷病者たちも、どこに身を隠したのか、一人も居なくなっていた。

捕虜となることを潔しとしなかったのだろう。私には、このことが忘れ難い思い出として、いまだに脳裡に残っている。＞

＜以下次号＞



カット　徳富光造　55期